

田辺聖子の小倉百人一首

- 1 秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ 天智天皇 13
- 2 春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山 持統天皇 18
- 3 あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む 柿本人麿 21
- 4 田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ 山部赤人 24
- 5 奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声きくときぞ秋はかなしき 猿丸大夫 27
- 6 かささぎのわたせる橋におく霜のしろきを見れば夜ぞふけにける 中納言家持 30
- 7 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも 安倍仲磨 33
- 8 わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山とひとはいふなり 喜撰法師 36
- 9 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに 小野小町 40
- 10 これやこの行くも帰るもわかれてはしるもしらぬも逢坂の関 蟬丸 43
- 11 わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人のつり舟 参議皇 47
- 12 天つ風雲のかよひ路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ 僧正遍昭 50
- 13 筑波嶺のみねより落つるみな川の恋ぞつもりて淵となりぬる 陽成院 53
- 14 みちのくのしのぶもぢずりたれ故に乱れそめにしわれならなくに 河原左大臣 56
- 15 君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ 光孝天皇 59

- 16 たち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かばいま帰り来む 中納言行平 62
- 17 ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは 在原業平朝臣 65
- 18 住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ 藤原敏行朝臣 69
- 19 難波濁みじかき蘆のふしの間も逢はでこの世をすぐしてよとや 伊勢 72
- 20 わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ 元良親王 75
- 21 いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ちいでるか 素性法師 78
- 22 吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ 文屋康秀 81
- 23 月見ればちぢにものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど 大江千里 84
- 24 このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに 菅家 87
- 25 名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られてくるよしもがな 三条右大臣 91
- 26 小倉山峰のもみぢ葉ころもあらば今ひとたびのみゆき待たなむ 貞信公 94
- 27 みかの原わきて流るるいづみ川いつみきとてか恋しかるらむ 中納言兼輔 97
- 28 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば 源宗于朝臣 100
- 29 心あてに折らばや折らむはつ霜の置きまどはせる白菊の花 凡河内躬恒 103
- 30 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし 壬生忠岑 106
- 31 朝ぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪 坂上是則 110
- 32 山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり 春道列樹 113
- 33 久方の光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらむ 紀友則 116

- 34 たれをかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに 藤原興風 119
- 35 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける 紀貫之 122
- 36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ 清原深養父 126
- 37 しらつゆに風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける 文屋朝康 129
- 38 わすらるる身をば思はず誓ひてし人のいのちの惜しくもあるかな 右近 132
- 39 浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき 参議等 136
- 40 忍ぶれど色にいでにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで 平兼盛 139
- 41 恋すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか 壬生忠見 142
- 42 契りきなかつたみに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは 清原元輔 145
- 43 あひみてののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり 権中納言敦忠 148
- 44 逢ふことの絶えてしなくはなかなか人に身をも恨みざらまし 中納言朝忠 152
- 45 あはれともいふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな 謙徳公 155
- 46 由良の門を渡る舟人かちを絶え行方も知らぬ恋のみちかな 曾禰好忠 158
- 47 八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり 惠慶法師 161
- 48 風をいたみ岩うつ波のおれのみくだけでものを思ふころかな 源重之 164
- 49 みかきもり衛士のたく火の夜はもえ昼は消えつつものをこそ思へ 大中臣能宣 167
- 50 君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな 藤原義孝 171
- 51 かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを 藤原実方朝臣 174

- 52 明けぬれば暮るものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな 藤原道信朝臣 177
- 53 なげきつつひとりぬる夜の明くるまはいかに久しきものとかは知る 右大將道綱母 181
- 54 わすれじの行末まではかたければ今日をかぎりの命ともがな 儀同三司母 184
- 55 滝の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ 大納言公任 187
- 56 あらざらむこの世のほかの思ひ出にいまひとたびの逢ふこともがな 和泉式部 190
- 57 めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに雲がくれにし夜半の月影 紫式部 194
- 58 有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする 大式三位 197
- 59 やすらはで寝なましものを小夜更けてかたぶくまでの月を見しかな 赤染衛門 200
- 60 大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立 小式部内侍 203
- 61 いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな 伊勢大輔 207
- 62 夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ 清少納言 210
- 63 今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな 左京大夫道雅 213
- 64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木 権中納言定頼 216
- 65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなむ名こそ惜しけれ 相模 220
- 66 もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし 大僧正行尊 223
- 67 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ 周防内侍 226
- 68 心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな 三条院 230
- 69 嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり 能因法師 233

- 70 さびしさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮 良暹法師 236
- 71 夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く 大納言経信 239
- 72 音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ 祐子内親王家紀伊 242
- 73 高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ 前中納言匡房 245
- 74 憂かりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬものを 源俊頼朝臣 249
- 75 契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり 藤原基俊 252
- 76 わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの雲居にまがふ沖つ白波 法性寺入道前関白太政大臣 255
- 77 瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむと思ふ 崇徳院 258
- 78 淡路島かよふ千鳥のなく声に幾夜寝さめぬ須磨の関守 源兼昌 262
- 79 秋風にたなびく雲の絶えまよりもれ出づる月の影のさやけさ 左京大夫頼輔 265
- 80 長からむ心も知らず黒髪のみだれて今朝はものをこそ思へ 待賢門院堀河 268
- 81 ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる 後徳大寺左大臣 271
- 82 思ひわびさても命はあるものを憂きにたへぬは涙なりけり 道因法師 274
- 83 世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる 皇太后宮大夫俊成 277
- 84 ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞいまは恋しき 藤原清輔朝臣 280
- 85 夜もすがらもの思ふころは明けやらで闇のひまさへつれなかりけり 俊恵法師 284
- 86 なげけとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな 西行法師 287
- 87 むらさめの露もまだひぬまきの葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ 寂蓮法師 290

88 難波江の蘆のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき 皇嘉門院別当

89 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする 式子内親王 297

90 見せばやな雄島のあまの袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず 殷富門院大輔 300

91 きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき独りかも寝む 後京極摂政前太政大臣 303

92 わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾くまもなし 二条院讃岐 306

93 世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも 鎌倉右大臣 310

94 み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり 参議雅経 313

95 おほけなく憂き世の民におほふかなわが立つ袖にすみぞめの袖 前大僧正慈円 316

96 花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり 入道前太政大臣 319

97 来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ 権中納言定家 323

98 風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける 従二位家隆 326

99 人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は 後鳥羽院 329

100 ももしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり 順徳院 332

終わりに

参考文献

342 336

田辺聖子の古事記

わたしと『古事記』

347

序章

349

上巻 神々の饗宴

357

天地はじめてひろく——国生み／黄泉比良坂／天の岩戸／八俣の大蛇／因幡の白兔と大
国主神の冒険／八千矛神の妻問いの歌／国ゆずり／神々は地上へ下った／海幸・山幸

中巻 倭しうるはし

421

英雄・神武の東征／久米歌／山百合の少女／三輪山の神／幣羅坂の少女／沙本毘古と沙
本毘売の物語／たたられた王子／漂泊の皇子／海を渡って戦う皇后／酒好きな天皇と乙
女たち／大山守命の反乱／天之日矛と伊豆志おとめ

下巻 恋と叛逆の季節

513

嫉妬する皇后／軽の乙女／争い合う皇子たち／赤猪子の歌／三重の采女／置目の婆さん

解説 田辺聖子

581

解題 浦西和彦

593